

はじめに

11年前まだ私が横浜に居た頃、私も誘われて30年ぶりに独標に登った。それは高校2年生の年を含めると4回目の独標であったが、事故直後の2回の追悼登山では感じたことの無い新鮮な気持ち、心の原点に戻ったような落ち着いた気持ち、心が洗われるような不思議な気持ちを味合わせてもらったことをはっきりと覚えている。この事故に対する思いは人それぞれに違うだろう。私だって遠く離れた地で、「あっ、今日は8月1日だったんだ。」と夜になって気づいた年も何回もあったし、常に11人と共に歩んでいるなんて思いはない。ただ、学生生活を含めた若い頃、重要な決断を迫られた時に彼らが背中を押してくれたことは何度かあった。「生き残った自分」という言い方は少し違うだろう、「死ななかつた自分」「生きている自分」という思いは、時として大きな支えになっていたことも確かだと思っている。

独標に行けばいつまでも年を取らない彼らに会える。そしておそらく自分も俗世のしがらみを忘れて、真っ新な気持ちで彼らと向かい合えるのだろうと私は思っている。そんな気持ちを多くの友に味わって欲しい。登りたくてもその機会の無かつた人、一人では登る決心がつかなかつた人、そんな人達が大勢いるに違いない。そして、10年前の追悼登山と同じように、比較的皆が参加しやすい週末に2009年8月1日は廻って来たのである。千載一遇のチャンスとはこのことだろう。天も我々に味方してくれている。そんなオーバーなことではないが、とにかく卒業40周年の年の8月1日は、たくさんの好条件が重なってどうしても記念事業に組み込みたい日になっていった。

もう一つ企画にあたって大事な伏線があつた。それは森山君の呼び掛けで参加した2年前の追悼登山である。地元松本へ戻って初めて参加した追悼登山も、それまでと同様に西穂山荘に1泊するものであつたが、松本から参加した私にとっては、前泊ではなく初めての当日泊だつたことがそれまでの4回と大きく違つていた。つまり、朝6:30に松本の自宅を出て、その日の11:40には独標に着き、14:20にはまた山荘まで戻つていたのである。この経験は、松本からなら安全に日帰り登山が可能だということを私に教えてくれた。そして、毎年学校の関係者が、上高地から登って西穂山荘に泊まることは知つていたし、その引率を鈴岡さん(2組)がやっていることも分かつていたから、日帰り組の責任を私が持てば記念事業に組み込むことは可能だという目算がたつた。学校からは日帰り組も毎年出ていて、こちらの担当を逢沢さん(8組)がやっていることもその後分かり、総ての取りまとめをお二人に任せることができた。

この記録は、そんな形で実現した2009年の追悼登山に参加された皆さんや、母校での慰霊式に参加された皆さんの思いを、鈴岡さんが呼び掛けてまとめてくれたものである。思いを寄せてくださった皆さんや発行にご助力いただいた皆さんに、心から感謝申し上げます。

平成21年9月23日

卒業40周年記念事業実行委員会 委員長 上條誠二